

## 海外伝道概要

「海外」とは文字通り海の向こうであり、日本では外国と同じ意味で使われる。しかし、日本以外の国々においては外国であっても陸続きの場合も多い。「海外」という言葉はどのような意味を持つのだろうか。

海外とは英語 overseas の訳語である。15世紀末に始まる大航海時代では遠い海外へ行くのは船舶によっていた。航海には当然冒険や探検を伴う。すなわち海外伝道は言葉や習慣の違う遠隔地への、冒険や探検の伴う伝道だと言えよう。だからこそ日本国内への伝道とは全く違う未知の世界への異文化伝道であることを承知しなければならない。

異文化伝道はその場所(伝道地)にいか「適応」するかが問題である。国内伝道と同じ考え、同じ方法で取り組んでも成果はあがらない。「適応」は伝道しようとする土地の言葉、風俗、習慣、歴史、地理、生活などあらゆる面を理解し、そこに馴染まなくてはならない。天理教の海外伝道の歴史をみると、ごく自然に「適応」を考え、対処してきた時もあった。しかし海外伝道初期は、やはり十分な対応とは言えなかった。

天理教の現在までの海外伝道は大きく2つの時期に分けられる。前半は個人や一教会単位での伝道、後半は天理教全体での組織的な取り組みである。組織的とは中山正善二代真柱を中心とした教会本部主導の海外伝道支援を言う。天理外国語学校創設や印刷所、図書館の開設、さらに伝道庁の設置などがそれに当たる。組織的な海外伝道支援は当然「適応」を考慮したものであった。

天理教史において最も早い海外伝道は朝鮮半島にて試みられた。明治26年頃、高知分教会(現大教会)の布教師が釜山に渡りおたすけを始めた。残念ながらこれは長くは続かなかったが、最初の海外伝道という壮挙と朝鮮語の必要性を痛感し高知にて朝鮮語の学校を開校したことは当時としては驚くべきことで賞賛されていた。

続いての海外伝道は明治29年と同30年の台湾伝道である。明治29年に発せられた「内務省訓令」は天理教の布教に大きな打撃を与え、日本での布教が困難になると考え海外を布教地として選ぼうとした人もあったと言う。

明治29年、防府系布教師によって最初の台湾伝道がなされ、明治30年からは諸井国三郎ら山名分教会(現大教会)の人たちが伝道のため台湾へ渡った。明治30年頃、山名の本拠地静岡県はすでに多くの教会が設立され、遠隔地伝道も始まっていた。しかし諸井は台湾伝道に内地とはかなり異なった方法を用いた。伝道支援の資金を集める組織を立ち上げ、台湾では殖産興業を行い、信者の有無に関わらず目に見える教会を建ててしまった。こうした伝道方法はまさに台湾という土地を意識した「適応」である。諸井国三郎という人には先を見る力があったのであろう。

明治の末期には瀬戸内海本島の布教師が朝鮮半島の現ソウルでおたすけを始めた。この伝道は明治末から大正、昭和初期にかけて朝鮮半島一体に広まり、続いて旧満州に伝わり、さらに南満州鉄道に沿って北へと広まって行く。

大正末期に天理外国語学校が開校し、二代真柱の意志による

教会本部の海外伝道支援が始まる。

昭和に入ると北京や上海など中国各地にも布教師がはいり、医療伝道も試みられる。また東南アジア、南洋の島々へも熱意を持った人たちによって地道なおたすけが展開され、教会が設立されていく。こうした日本近隣への布教は、天理外国語学校創立の理念にもあるように海外伝道は近隣諸国からとの二代真柱の考えと一致する。

アジア地域への伝道は日本人が移り住む時代と重なっており、大陸や朝鮮半島、また南洋の島々に住み始める日本人への布教が多かった。しかし中にはもっぱら現地の人々へのおたすけを行った布教師もあった。

一方、明治末、ある出来事から英国ロンドンへの布教が始まる。日本に電気技術の指導に来ていた英国人が船場教会(現大教会)を訪れ、ロンドンへ布教に来るよう要請し援助もすると言った。明治43年、船場から3人の布教師が派遣され遠い異国で奮闘したが、如何せん当時世界一の先進国であった英国で新興国日本の宗教に関心をもつ人はなく、伝道は実を結ばなかった。

北米大陸、ハワイ、ブラジルなどへの伝道は日本がこれらの地域へ移民を送り込む歴史と関係が深い。

日本の移民は明治維新頃に始まったハワイ移民が最初で、続いてアメリカ本土、ブラジルなどへも多くの日本人が移り住んだ。これらの地域では日本人の移民とともに伝道、おたすけも展開されることになる。

第二次世界大戦の終結によりアジアに居住する全ての日本人が内地へ引き揚げることになった。終戦時、アジアの諸地域には300カ所を超える天理教の教会があった。しかし敗戦によって教会建物は現地に残したまま、日本人信者は日本に引き揚げってしまう。一方、現地人信者は教会本部との通信も途絶える状況になり、戦後のアジア布教は一から再出発しなければならないと思われた。しかし、韓国では信仰が生き続け韓国人による組織作りが図られていた。

第二次世界大戦後に新たに海外伝道が行われた国の一つにコンゴがある。昭和35年、二代真柱はヨーロッパ巡教の途次飛行機の都合で立ち寄ったブラザビルで3日間を過ごし、偶然懇意になったタクシー運転手との縁からアフリカに本教の伝道が始まる。

ところで現在、世界(日本を除く)の38の国と地域に天理教の布教拠点がある。戦前の布教地がある程度限られた地域で、しかも日本人がたくさん在住する地域であったのに比べ、現在の布教拠点は五大陸全てに亘っている。これは海外部や各地の教会が積極的に世界布教に乗り出そうという姿勢の現れではないか。以前の個人的や一教会単位の海外伝道ではなく、組織的支援の意識を持つ人が多くなった結果だと思われる。海外布教は熱意だけが先走るのではなく、「適応」といった問題を等閑にしないという考えが常識となった。

最後に、外国語の天理教図書を作る場合、日本語の翻訳でなく、オリジナルとして執筆された外国語(当該国にとっては現地語)による書物の出現が期待される。

次号以降、何回かに分け地域ごとに海外伝道を述べる。